

第209号

平成19年2月

E-mail: © 2007

shimz@mb.infoweb.ne.jp

SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

TEL/FAX 045-933-0379



74回め



MENU

- 特製ブレンド 380
- レモンティー 350
- 白替りケーキ 300
- ぶるせす 無料

アルコールは置いていません

「マスター、今度うちの部署ではCMMIのレベル4に取り組むことになったのですが、何をすれば良いのかよく分からなくて」

『えっ、あなたのところはいつの間にレベル3になったの?』

「もう2年前になります」と、はにかんだ。

『へー、そんな前に取れていたんだ。知らなかったな。CMMIに取り組んでいたことは聞いていたけど』

「ばたばたして言いそびれてしまったかも知れませんか」

『そうか2年前か』

「はい。2年経ったこともあって、今度はレベル4を取れるということなんです」

『ところで何をすれば良いのか分からない?』

「計測データを使ってプロセスを改善するということは分かっているのですが、プロセスを改善するという意味が良く分からないのです」

『“計測データを使って”なんて分かったようなことを言っているが、計測データって何のことか?』と少しきつく突っ込んでみた。

「バグの発生率や生産性、ベースライン設定後の仕様の変更率、それからマイルストーンに対する遅延率もあります。レビューでの指摘率もあります。バグの発生率に関連して、バグの原因プロセスの分析データもあります」

『ほう、なかなかいろいろなデータを集めているじゃない。仕様の変更率やバグの発生率のところで“機能別”には集計しているかい?』

「機能別の仕様変更率という意味でしたら、そこまで分けていません」

『まあそうだろうな。で生産性というのは、全体工数に対するソースコードの生産性か?』

『そうです』

『実装工程の工数に対するソースコードの生産性は取っていないのか?』

「以前にマスターに教えてもらったことがあるのですが、CMMのコンサルティングの中では扱われませんでした」

『口では“プロセス改善”と言いながら、2種類の生産性データを収集する意味が分からないということだね』

「どういうことでしょうか?」

『この2種類の生産性データを使えば、実装プロセスまでのプロセスと成果物が適切に連鎖するように考えられていたかどうかが見えてくるんだがね』

「全体工数に対する生産性だけではそれが見えてこないということですか?」

『見えるはずがない。それでもなかなかまじめに収集しているじゃない。それだけ収集している、何が分からないのか?』

「データは収集しているのですが、これとプロセスを変えるということが繋がらないのです」

『もしかすると、これまで使ってきたプロセスや成果物の定義は、あなた達自身で考えたものではなかったりして』

と云われて、バツの悪そうな表情を見せた。そ

のことに何となく不安を感じていたのだろう。

「はい、SEPGの方で用意されたものです」

『それを4年以上続けてきたということか?』

「そういうことになりました」

『その間、プロセスや成果物の構成を変えていない?』

「いえ、成果物の構成だけは初期の頃は使いたくなくて何度か変更しています」

『それも、あなた達は注文を付けるだけで、実際に変更したのはSEPGの人たちかな?』

「そうです」

『それでも、そうやって改善された成果物の構成で、少しはうまくいったのか?』

「使い慣れたこともあるかも知れませんが、1年後ぐらいには安定してると思います」

『その効果はデータで証明できるんだが。さっき仕様の変更率を収集していると言ったよね。それで仕様の変更率はどれくらいかな?』

「先月のプロジェクトでは4.3%でした」

『その数字はあなた達としては良い方かな?』と突っ込んでみた。

「はい。他のプロジェクトでは100%を超えることもしばしばあります。正確に計算していませんが、平均的には80%ぐらいになるかと思っています。これってやっぱり多いですよ」

『80%という数字は少なくはないよね。でも多くの組織でもそんなもんだろう。問題は、その状態のままCMMIのレベル3になってしまったことだ。問題解決をぜんぶ先送りしながらCMMのレベル取得に邁進してきたわけだ。バグの方も集計してきたか?』

「はい、そうです。KLOC当たりのバグ発生率も計測していますが、特にそれを使ってプロセスを変更したということはありません」

『じゃ、要求仕様に関するプロセスに原因がある割合も把握しているかな?』

「はい、それも掴んでいます。もっとも、原因プロセスの分類の判断に不安があります」

『多少は目をつぶるとして、要求仕様に関するプロセスに原因があるというバグとして、たとえばどんなのがあったか覚えているか?』

「そうですね。装置の回転を止めるときの判断の条件が一つ漏れたというのがあります」

『仕様モレだね』

「そうです」

『ところで、その制動の判断に関する仕様はいくつかの条件の組み合わせがあると思われるが、実際にはどのように表現されていたか覚えているか?』

「たしか“ペースト作文”だったと思います。あのとき、マスターの言う通りだ、と思ったのを覚えています」

『ちょっと方向を変えよう。バグの原因はプロセスにあると云うことは理解しているよね』

「はい、そのつもりです」

『じゃ、要求仕様に関するプロセスにはどんなプロセスがあるか?』

「えーと、顧客からの要求をまとめ

るプロセスでしょう。集めた要求を仕様化するプロセスでしょう。それから要求仕様をレビューするプロセスも含まれますか?』

『ああ、含めてもいいよ。他には?』

「他にですか? なんだらう?』

『考えつかない? まあいいだろう。さっきの“ペースト作文”で仕様モレしたケースは、この中のどのプロセスに当たるの?』

「仕様のモレですから、要求を仕様化するプロセスに原因があるということですか?』

『ということは、その仕様化プロセスの何を改善すれば、この問題は解消するのか?』

「何を改善するか?』

『そのままでは、また同じような仕様モレが起きてしまうわけだろう?』

「そういうことですが、何を換えればいいのか、ですか?』と行って行き詰まってしまった。まったく意味が分かっていないようなので、

『たとえば、“条件が漏れないように注意する”と書くのか?』

「それを“要求を仕様化するプロセス”の定義書に書くという方法ではダメですか?』

『その方法も考えられるがね。ただ今回は、実際に条件が漏れたことで、もう一つの条件があったことに気づかされたわけだが、実際に要求仕様を書いているときは、まだ漏れたわけではない状態で、仕様モレが起きる可能性があることに気づかなければならない』

「はい、分かります。“判断の条件がもれないように注意する”と言われても、今その時点では漏れていることが分かっているわけではないですものね」

『あなた達は、“要求仕様作成ガイドライン”というものは用意していないのね。あるいは“手順書”と呼んでいるかもしれないが』

「はい、一応あります」

『“一応”とはどういう意味だい? 自分たちでまとめたものではない意味かい?』

「“組織の標準プロセス”として用意されているセットの中にあります」

『なんだ自分では書いていないのか。だからプロセスの種類を聞いたときに出てこなかったわけだ。ところで、そこには要求仕様の書き方や注意すべきことなどが書かれているか?』

「たしか、そのようなことをまとめた章があったと思います。』と直ぐに気がついた。

『そうか、この場合は“要求を仕様化するプロセス”ではなくて、“要求仕様作成ガイドラインを作成する”というプロセスを変更した方がよさそうですね』

『そう。あるいはそれを使って事前にトレーニングするプロセスも変更することになるかも』

『そうか。そういうことか。このようなプロセスの改善なら、もっと早い段階でも取り組めたですね。そうすれば、仕様の変更率ももっと下がったでしょうし、仕様関係のバグも減ったですよ』

『そう、何もレベル3まで先送りする必要はなかったんだよ』

「レベル4の取り組みは、基本的にはこの延長線上でいいんですよ』

『偏差値などを使ってもうちょっと厳密さが求められるけどね』

プロセスの改善は、もっと早い段階でも実現できる。その方が実際のプロジェクトの推進も楽になるし、プロセス改善の意味も理解しやすくなる。

か ね の 音 192

日本人を持たない存在を畏れる

路上駐車を取り締まりが強化されたあと、確かに、以前と比べて路上での駐車は減少した。「実質一車線」だった近くの道路も時間帯によっては「二車線」に戻った。だが、駐車する車そのものが減ったわけではない。一部はコイン駐車で回ったが、大部分は、コンビニや郵便局の駐車場に一日駐車したり、わき道の少し広いところに止めたり、公園の誘導路や駐車スペースに止めている。

一般道路から入ることのできる高速道路の駐車場も占領されたようだ。そこでは駐車場のスペースの半分は埋まっているのに、店にはその数に見合う客は入っていない。たしかにこの行為を取り締まる法律はないので違法ではないが、客としてその駐車場を利用しようとする人が車を止めようとしたときに空き場所が無いということになるし、店の方も営業に支障をきたす。最近ではコイン駐車場が増えており、そこに一日停めても八〇〇円、一〇〇〇円位で済む。一台の車に合流してゴルフに行こうという人なら、これく

らの負担は可能なはず。中には、この料金すら踏み倒す。

何とか、お金を使わないで車を駐車する方法はないか、ということでも考えた。出したものだろうが、あまりにも自分勝手である。よくこんなことが平気で行けるものかと思つたが、ふと考えみると、同じようなことが「自転車」でも起きている。開店前の駅前のスパーの駐輪場に自転車を停めて出勤する人が少なくない。中には、隣り合うアパートとマンションの互いの敷地を囲むフェンスのわずかなすき間に自転車を差し込んで出勤する人もいる。決められた駐輪場に停めると一回二〇〇円、月契約では二〇〇〇円かかる。でも定まった仕事を持つている人なら、これくらいの負担は大きくないはずである。しかもその駐輪場よりもスパーの方が遠いのである。払わないで済むのなら払いたくないという事なのだろうが、それは人の迷惑を考えない自分勝手な「節約論」に過ぎないことに気づいていない。いや、中には誰も気づかなかつたことを最初に「発明」したかのように誇っている人もいる。

子どもの給食費の未納金が、一〇〇五年度で二億円を越えるといふ。その多くは払えない家庭ではない。払わないで済むのであれば放置しておけ、

という発想である。これを学習した子どもは、将来どのような行動をとるだろうか。

河川敷でゴルフの練習をしている人も多くなった。まるで無料の打ちっ放しの練習場と勝手に決め込んでいるようだ。自由に使える小遣いが少なくなつたために練習場に行けないのか。当然、腕の方もレベルは低いのでどこに飛ぶかわからない。危なくって河川敷にも出かけられない。そうして河川敷に出かける人が少なくなれば、彼ら無法者は「安心して」練習が出来るのである。中には、「ここでボールを打っているのが分かっていいるのだから、出かけてこなければよいのだ」と居直る始末である。「このおっさんの脳ミソはどうなっているのか!」。

河川敷の不法使用はほとんどが条例で禁止されているので、取り締まろうと思えば簡単にできるはずだが、実際には看板が立っているだけで取り締まっていない。無法者もゴルフの練習を禁止する看板が立っていることは知っている。それを知って無視し続けることの「怖さ」に気づいていない。ちなみに、三〇年前に私がゴルフを止めたのは、このような人たちと同じことをやりたくはないと思つたからだ。ゴルフはもっと紳士的なスポーツだと思つていたが、現実の低俗さに幻滅したのである。

最近はずっとひどくなった。消防署の半鐘は盗んでいくし、道路の側溝の編み目のフタもこっそり盗んでいく。公園への自動車の進入を防ぐためのアルミ製の柵も、止め金具を切断して持ち去っていく。深夜に工事会社の敷地に車を乗りつけて電線を丸ごと盗んでいく。何でもありか。

金属の相場が上がっていることで高く売れるだろう。何年か前には、住宅のアルミ製の扉も夜の内に外して持ち去られたケースもあった。自分の欲望を満たすことに対してまったく歯止めが利かなくなつた。お金がなくなれば勝手に家に押し入って盗んでいく。そこに人がいれば何の躊躇もなく住人を殺してでも金を盗んでいく。そこに後ろめたさはない。捕まったら運が悪かつたと思つていないのだから。自動車ではねても平気で逃げていく。フロントガラスが壊れていても、気がつかなくなつたところをぶく。

今月の一言

二一世紀に入って日本の労働者の所得が二極分化した背景には、経済に国境がなくなつて、アウトソーシングやオフショアリングが進んだことがある。コストが安い国に仕事が行き、同じものを作るのであれば、安いコストに引張られるのである。一〇〇〇円ショップに行つてみると、「これが一〇〇円?」と驚かされることはかなりある。製造コストの他に輸送コストを含めても「一〇〇円」で売れるのである。単純労働ではもはや対抗できない。

「リカードは現在でも正しい。アウトソーシングやサブプライチエン化やオフショアリングに障壁を設けないほうが、アメリカの個人大多数の暮らしはよくなる。」(「フラット化する世界」トーマス・フリードマン著、日本経済新聞社刊より引用)

が、著者が言つたように、時代の流れに対して障壁を設けないほうが、長い目で見たときにメリットがあるというのであれば、そこにはいくつかの前提条件が考えられる。その中の最大ものはその国の教育レベルが高いことである。知識労働者といえども一時的には失業に追い込まれるだろうが、新しいサービスを創造し、新しい産業を生み出す力があれば時代に対応できるし、障壁を設けないことによって、むしろ先にそのレベルに到達できるという考え方も理解できる。

影響を受けたのは単純労働だけではな。かつての「IT革命」をリード

私は経済学を習得したわけではないので、デビッド・リカードの経済理論が正しいかどうかの判断はできない

逆に、教育レベルが低ければ新しい産業を起すこともできず、時代の波から脱出できない。それは、デフレの状態から当分脱却できないことを意味し、所得の二極分化も拡大する。